第一回中間報告

（報告期間 2019 年 8 月 31 日 ～ 2020 年 5 月 31 日）

基本情報

氏名：畑中直人　（国際ロータリー第 2710 地区 2020-2021 年度 地区補助金奨学生）
派遣クラブ：三次ロータリークラブ
カウンセラー： 前田 茂様
受入クラブ：Rotary Club of Bordeaux
カウンセラー：Ms. Danièle Faivre
教育機関：ボルドー・モンテーニュ大学
Bordeaux Montaigne University
専攻分野：アフリカダイナミクスに関する学際的研究
Master Interdisciplinary Studies of African Dynamics (MIDAF)

目次

1.学業の開始
2.留学先について
3.学業面での成果
4.受け入れ地区でのロータリーとの関わり
5.直面した課題、問題点等

１.学業の開始

2019 年 8 月 30 日に渡仏し、翌日 8 月 31 日に留学先のボルドーに到着しました。広島のゲストハウスで働いていた際に知り合ったボルドーの友達がいたので大変心強かったです。手続きの不備で予定日に入寮できなかった時は家に泊まらせてくれました。町や生活に関する情報を教えてくれたので、留学生活の立ち上げを順調に済ませることができました。

私が所属する Master Interdisciplinary Studies of African Dynamics（アフリカダイナミクスに関する学際的研究）は、4 学期（各 30 単位）で構成されている 2 年間の修士課程（計 120 単位）で、私は 2019 年度に入学しました。2019 年 9 月中旬から 2020 年の 5 月までが 1 年目のプログラムとなっており、2020 年 9 月から 2021 年 9 月までが 2 年目のプログラムで、後期にはインターンプログラム・卒論執筆があります。

ボルドー・モンテーニュ大学はボルドーの近郊、ペサックにあり、16,000 人の学生が在籍し毎年 2000 人ほどの留学生を受け入れています。1970 年の大学改革でボルドー大学が分割され、ボルドー第 3 ミシェル・ド・モンテーニュ大学として独立した 2014 年に、ボルドー・モンテーニュ大学に名称変更しました。外国語教育に力を入れていて、フランスの中で有数の日本語学部があり、日仏交流サークルがあります。イベントに何度か参加し日本語学科の友人ができました。

大学キャンパス

大学図書館

2.留学先都市について

ボルドーはフランス南西部に位置し、20 万人ほどが在住しています。大学からボルドー中心部までは、路面電車で 20 分ほどなので、買い物や散策にときどきでかけていました。ボルドーには、広島と同じように、路面電車が走っており、多くの市民が利用しています。世界的なワインの産地であるのに加え、国立歌劇場や、サンタンドレ大聖堂など歴史的建築物があり、2007 年にはボ

ルドーの都市全体がユネスコの世界文化遺産に登録されました。とても魅力的で住みやすい街だと思います。

ボルドー市内

右：国立歌劇場

３.学業面での成果

前期は８つ、後期は７つの授業があり、アフリカの開発について広範囲に学びつつ、研究で必要なスキルを高めることができました。

前期に実施された授業は以下の通りです。

・人口統計学と開発：数字の課題
・アフリカの歴史
・セミナー
・開発の環境課題
・プロジェクト１
・アフリカの環境
・アフリカの人口移動問題（英語）
・専門入門と文章作成

前期の授業は９月下旬から 12 月末までありました。歴史、環境に関する授業が特に印象的でし

た。「アフリカの歴史」の授業では、アフリカの近現代史を学び、植民地から脱植民地・独立の流れを把握しました。この授業の評価で、初めて口頭試問を経験しました。10 分ほど準備時間が与えられ、テーマであった植民地時代の教育政策について答えました。

環境に関する授業は 2 コマありました（「開発の環境課題」、「アフリカの環境」）。サハラ地域・赤道直下といったアフリカ地域ごとの気候や地形といった環境的な違いやその特色について、そして人口増加や自然破壊・地球温暖化といったアフリカが現在直面している課題と開発問題について学びました。

環境の授業の評価としてグループワークがあり、サヘル地域の食料安全保障について 3 人で準備しプレゼンを行いました。等降水量線の南下などの地球温暖化により、サヘル地域の住民同士の資源や土地をめぐる対立が激化し、環境破壊をもたらしています。また食料供給量を上回るペースの人口増加により食料安全保障問題が深刻化しています。このような問題に対し、各政府の変革が必要で、反政府組織の結成を防ぐためにもより包括的な統治の必要性を説きました。

後期に実施された授業は以下の通りです。

・アフリカの法律
・フィールドセミナー/セミナー　*ロックダウンの影響で実施されず研究課題のみ
・プロジェクト 2
・専門入門と文章作成 2
・地図作成と統計 1
・人類学
・Rurbain Africa（英語）
・アフリカの地政学（英語）
・アフリカとジェンダーについて（英語）*ロックダウンの影響で実施されず研究課題のみ

後期は、1 月上旬から 3 月末までの大学での授業があり、4 月にタンザニア農村部へのスタディツアーがある予定でしたが、コロナにより延期（2020 年 9 月の新学期オリエンテーションで中止が最終決定）になりました。6 月にはボルドーで持続的な都市開発をテーマにした、第 28 回目のアフリカ・フランスサミットがある予定で、私たちの修士課程の学生も参加する予定になっていました。みんなで 3 つのテーマに関する動画を、タンザニア現地で撮影し、動画を編集し、サミット中に上映するという大きなミッションでした。私は「食料安全保障」についての動画をほかの生徒と協力し作製する予定でしたが、中止になりました。

第一回目のロックダウン（3/17-5/11）発令により、大学が前日の 3 月 16 日に閉鎖されました。大学全体の授業がオンライン授業に切り替わったのですが、私の修士課程では、タンザニア渡航に合わせたスケジュールで残りの授業の講義回数が数えるほどだったことや、講師の都合により（「アフリカとジェンダーについて」）実施されず、研究課題に切り替わりました。対面授業で特

に印象深かったのは法律、地政学の授業です。

「アフリカの法律」の授業では、公法の成り立ちと特徴について学び、国家権限の仕組みについてアフリカと欧州で比較しつつ学べたのは大変興味深かったです。研究課題では、アフリカの民主主義と憲法の問題・課題ついて 3 人で協力してまとめました。

「アフリカの地政学」の授業では、隔週ごとに国のケーススタディについて、分析しました。その国で起こっている、政治対立、社会不満の要因、紛争の周辺地域の影響、周辺国との関係性、宗主国をはじめとする国際社会の役目について毎回白熱した議論を繰り広げました。

「プロジェクト 1,2」の授業は、開発案件の立案時に行う問題分析 、実施時に行う評価・分析方法等を、前期･後期の 2 学期にわたり学びました。実際に開発の分野で 用いられるツール SWOT 評価、 ロジカルフレームワークを学習できたことは大きな成果です。5 人グループで、ブルンジ首都（ブジュンブラ）での、フツ・ツチの社会協調に関するシュミレーションプロジェクトを行いました。課題の中でプロジェクトの目標・上位目標、目標の達成度を測る指標や目標値の設定などを考えロジカルフレームワークの理解を深めることができました。

上記の通り英語で行われた授業もいくつかありました。本修士課程は、ドイツのバイエルン、タンザニアのダルエスサラームの大学とパートナーシップを組んでおり、後期の授業では一緒に英語で授業を受けました。フランスにいつつ海外の留学生と英語で意見交換できたのは大変良い機会でした。「Rurbain Africa」の授業では、田舎と都会それぞれの定義の在り方が変化していることを学びました。Rurbain とは Rural「田舎」と Urbain「都会」の中間的な状態を表す用語で、都市と農村両方の特徴を併せ持つ概念です。

Rurbain の特徴をもつ都市（町）とその開発分野について紹介するという研究課題において、私はナイロビから 100 k m ほど離れたところにあるナイバシャ湖地域のバラ栽培について研究しました。研究の結果、バラ栽培産業は、現地の経済・社会発展、リノベーションをもたらしていることがわかりました。そしてナイバシャ周辺の地域は、古典的な農村地域とは言い難く、人、サービス、企業の間の相互関係を通じて都市部と密接につながっているが明らかになりました。

修士課程の生徒全員で運営する学生団体（AMIDAF）の活動にも精力的に参加しました。アフリカの文化と修士プログラムを広報するのが大きな目的でしたが、翌年 4 月に予定されていたタンザニア、スタディツアーへの資金集めも目標でした。担当者を決め毎週水曜日は、キャンパス内にスタンドを出店し飲み物や軽食を販売したり、AMIDAF の活動についてパンフレットを渡して説明したりました。12 月には、「Bulles d'Afrique」というアフリカの文化イベントを二部制で開催しました。第一部では、伝統的なボードゲームをする場を設けたり、SDGs についてのゲームを行ったりしました。第二部では、西アフリカの伝統的な料理などを販売(mafé: ピーナッツシチュー)した他、アフリカ人のダンサー、ミュージシャンなどを招いたミュージックイベントなどを行い大成功に終わりました。

イベント出店時の様子

4.受け入れ地区でのロータリーとの関わり

一回目のロックダウン実施直前の 3 月 11 日に、ランチミーティングに招待していただきました。受け入れロータリーは渡航前に正式に決定していませんでしたが、ボルドーロータリークラブが受け入れを承認してくださりました。ロータリアンの方々と交流し、2021 年度の奨学生として紹介していただきました。一回目のロックダウン発出以降、大人数での会合は控えるという感染症予防対策が継続されているので、その後は招待されていません。カウンセラーのダニエルさんとメールで連絡をやりとりさせていただきました。

5.直面した課題、問題点等

学部時代との講義のスタイルの違いに慣れるのに時間がかかりました。多くの場合パワーポイントは使われず、ホワイトボードなどに板書されない場合がほとんどだったので、ノートに授業内容の要点をまとめて、いかに早くメモするのかが大きな課題でした。また 1 コマ 3 時間という授業もいくつもあったので、スタミナが必要でした。授業を理解しノートに板書することに精一杯で、ディスカッションに積極的に参加できなかったのが反省点です。また、政治分野を専攻していた学部時代より、裾野が広い講義を受けられることがこの修士プログラムの利点である一方で、自分の得意分野ではない授業を理解するのに苦労しました。環境の講義の中には、土壌学や、地形学といった専門性の高い内容を学習する時がありました。高校で地理を選択せず、中学の知識程度しかない私にとって大変でしたが、足りない知識をインターネットや文献を使い補完する

ことでなんとか乗り切りました。

一番大変だったのは、新型感染症 Covid19 の大流行により 3 月 17 日から始まった 1 回目のロックダウンです。レストラン、バーなどの飲食店の店内営業の禁止、商業施設・文化施設が閉鎖され、野外における集会、友人や親族との会合が禁止されました。スーパーへの買い物，通院，テレワークが困難な場合の通勤，若干の運動といった必要な外出のみ許容され、規則に反した者は罰則(135 ユーロ)を受けるという厳しい規制が敷かれました。ロックダウン発表しては、スーパーからパスタ、小麦後、トイレットペーパーなどの品薄状態が続き、パニック状態がしばらく続きました。当初予定されていた期間から 2 回ほど延長されおよそ 56 日間実施されました。自由が大きく制限され、自宅で過ごす時間がほとんどで、どのように健康的な生活を過ごすのか、勉学のモチベーションをどのように保つのがとても大変でした。